第 153 号
6月号
西郷派大東流合気武術
大東流
志友会報

〒802-0985　北九州市小倉南区志井6丁目11-13
㈱綱武出版　☎093（962）7740　FAX093（961）8224
Eメール：saigoha@skyblue.ocn.ne.jp

●本紙の年間購読は本体3,000円＋税です。

合氣語録

●時代に合わせての簡化思考

近年の武術や武道と言われるものは、本来の武技の意味が忘れ去られているため、高度な行法を有するものは、研究されなくなり、その一方で、映画やテレビに見る派手なアクションをするものについては、若者を中心に積極的に採用され、本来の主旨から外れた方法が持て囃されている。

そして「秘伝」の持つ意味は益々軽視され、肉体を動かしての、心臓に負担を掛ける心臓肥大症になるものばかりが、秘伝にとって代わられている。

また合気道の、特に初段から三段程度の大学クラブ活動の初心者の演武は、技が掛からないのに大袈裟に飛び込んだり、触れてもいないのに足払いで跳ねられたりの誇大動作は、非現実的で舞踊の領域のものであり、真剣に格闘技を志す修行者から冷ややかな嘲笑の目で見られている現実もある。

これらのことから考えると、純粋な昭和三十年代の全盛黄金期の合気道一本主義で押し通し、狐疑感もなく練習に励んでいる人は、実に稀である。

合気道は健康法や女性の美容法としては、それなりの効果があるのにも関わらず、武術としての実戦効果は時代にそぐわなくなって来ており、投技を考えてみても柔道の比ではない。

合気道や大東流や八光流の投技の多くは、手首を取らせたり、捕まえたりしての非現実的な防禦技が多く、相手の懐深く飛び込んで肩に担いだり、腰で払ったり、あるいは足で太腿や膝等を攻めて、払い投げるという決定的な「払い投」が無いのである。また頭上から落とし込む《岩石落し》という柳生流の「柔」に見られる業も省略されている。

ここで認識せねばならないことは、崩しによって相手の誘導に弾みを付けたり、相手の動きのタイミングを巧みに読み取ってそれに合わせ、一人若くは大勢を制することは並大抵のことではないということである。

また大東流（松田豊作）、八光流（奥山吉治・号龍峰）という伝承経路を辿った少林寺拳法（中野道臣。一般には金剛禅少林寺初代管長・宗道臣師家として知られている）に於ても、合気道と同じく型通りの関節技や投技があり、実戦では極めて効果が薄い観がある。

人と人が生死を賭けて格闘する場面は、双方の一歩も譲らぬ気構えから考えて、大量のアドレナリンホルモンが分泌される状態にあると考えてよい。アドレナリンの分泌で神経が鈍感になった双方が、関節技や投技を掛け合って止めを差すのは、極めて難しい問題である。徒手空拳の一撃必殺に於ても同様である。

このような非現実的な技法が徘徊する今日、合気武道界は大きな転期を迫られている現実がある。

西郷派大東流の立場からいうと、初心者段階からの無手無刀の柔術の技法は「手解き」以外を除いて無理があり、剣の業を習熟した後に無手無刀が可能になる、ということを修行の基本課題にしたいものである。

●秘伝科学が抜け落ちてしまった現代の武道界や格闘技界

「戈を止める」と書く、武の儀法は、今日、まさに「戈を止めないもの」に成り下がっている。古人の智慧は、すっかり失われ、西洋流の愚かしい強弱論が、一時の幅を利かせている。

秘伝科学の意味からすれば、「合気」もその古代科学の宇宙の玄理から出発したものであり、ここには原始太陽の神代からの、発生以前の理がある。

さて、原始太陽はその後、宇宙創造の根源として、三柱の神を創造した。この神こそが、天之御中主神を中心軸に据えた神であり、その軸を左右に転じる神が高御産巣日神であり、神産巣日神である。

この三柱の神は、それぞれが独立した神でありながら、一体となって活動する神である。

天之御中主神は中心に坐する神であり、同時に人の中心に坐する神である。

また高御産巣日神は何処までも高く、気高く、健く、外に発する遠心力を伴う働きをする。

更に、神産巣日神は、カミ、である事から「噛む」であり、噛みしめる内包する、あるいは中心軸に向かう事を目的として働く神である。この三柱の神の働きによって、「合気」が構築されているのであり、これが一致した時、「躰動」として人間のから発気されるのである。

「合気」を秘伝科学として考える根底には、宇宙の三柱の玄理があり、これが臍下丹田より発気されて、高御産巣日神が具現化されれば「脱力」となり、これが合気力貫となる。

また密着し、入身として懐に入り、力が凝縮されれば神産巣日神の働きが具現化されて、高度な集中力を発気する事になる。

合気戦闘理論　その四

昭和十年代当時、日中戦争は長期化の様相を呈し、日本の南方進出が連合国との摩擦を深めていた。太平洋戦争突入まで、種々外交交渉が繰り広げられたが、アメリカの挑発により、1941年12月8日、日本のハワイ真珠湾奇襲攻撃によって開戦に突入した。

戦争初期、日本軍は優勢であったが、42年後半から連合軍が反攻に転じ、ミッドウェー、ガダルカナル、サイパン、硫黄島、沖縄本島決戦等において、日本軍は致命的打撃を受け、本土空襲、広島・長崎の原子爆弾投下、ソ連参戦に及び、45年8月14日連合国のポツダム宣言を受諾、9月2日無条件降伏文書に調印よって、無慙な敗戦に至った戦争である。戦争中、日本ではこの戦争を、大東亜戦争と公称し、中国や東南アジアなどアジア諸国では、自国が戦域に含まれた戦争であった事から、アジア太平洋戦争とも称されている。

さて、この戦争において、最も重要なことは、アメリカこの工業力や生産性の高さもさることながら、この戦争を指導した日本とアメリカの戦争指導者の持つ、思想と発想の違いに大きな開きがあった。日本の戦争指導者・首脳陣が、実は「戦争」というものも、そこに横たわっている戦争哲学という実体も知らずに戦ったのに比べ、アメリカの戦争指導者は、戦争という非情な実体を、手に取るように把握していたという事である。また、彼等を取り巻く、スタッフも非常に優秀であった事だ。

こうして考えると、武器や兵力の差は、それを使う人間側の能力や教養の差による事が原因しているという事である。

この典型的なものがベトナム戦争である。

ベトナムに対しアメリカは、年間約二五〇億ドルの巨額な戦費を投じ、核兵器を除く、あらゆる新兵器を投じながらも、無慙に惨敗する。勢力の大小や、物量的な大小を比較すれば、ベトコン（南ベトナム解放民族戦線）側にとって、ベトナム戦争こそ、まさに無謀な戦争であったはずだ。

シンパに傾く歴史学者や反戦主義者は、こと、太平洋戦争においては日本の無謀を指摘する。

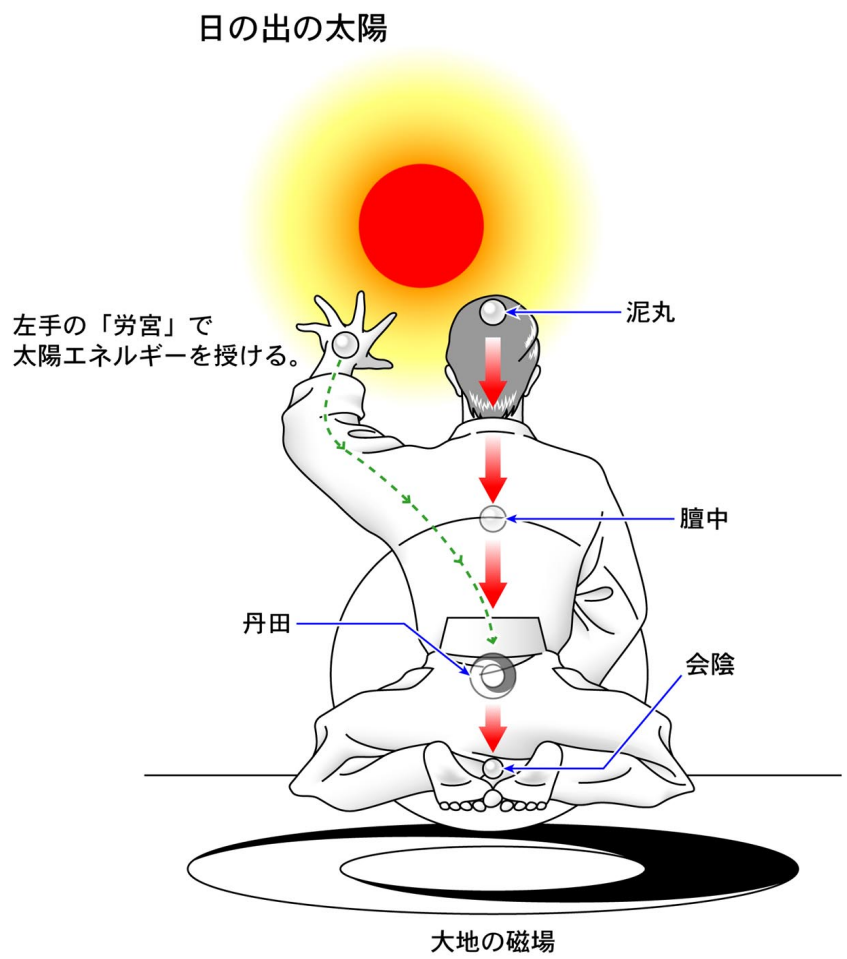
しかし、圧倒的な大敵と戦った故に、それを無謀と決め付け、否定するならば、日清戦争や日露戦争も否定されなければならず、朝鮮戦争もベトナム戦争も否定されるべきであろう。

アメリカの圧倒的な国力差から見て、強大国に刃向かう事は、無意味かつ無謀であるから、朝鮮戦争もベトナム戦争も、戦う事は無意味であり、朝鮮人民も、ベトナム人民も戦わずして、資本主義国家の総本山であるアメリカの軍門に降るべきだったのか！？

こうして考えてくると、何故太平洋戦争のみが無謀な戦争の譏を受けるのか。

国力の差において、二乗の法則が働いている事は否定できないが、一方において、これが決して公理ではないと言う事だ。そしてこの事が戦後に至って、太平洋戦争の真の姿を、一度でも論じられる事は決して無かった。

つづく



西郷派合気の日拝の秘術　イラスト／曽川　彩

『日拝の秘術』について

西郷派大東流合気武術では、静止状態の時を左は「ひ」の陽、右を「みず」の陰として考えるが、これが一旦動きに転ずると、陰陽が逆転する。陰圧が高まるのは左手の労宮を襲い、そこからマイナス・エネルギーが侵入するからである。マイナス・エネルギーは左手の労宮から侵入し、肘や肩を経由して、背中の風門にいたり、風門から頸椎を登り、「亜門宮」に達する。そしてここを占領して、身体の温度機能を破壊してしまうのである。要するにこれが憑衣・憑霊の実態だ。これを回避するためには、左手の労宮を太陽に向け、ここから陽圧を高めるプラス・エネルギーを充電し、日拝を行って、マイナス・エネルギーと拮抗をはかるのである。

西郷派大東流合気武術総本部

大東流霊的食養道HP

幸福をもたらしたはずの飽食の時代　人々が得たものは　一時の快楽と癒えぬ病　そして終わることのない欲の循環
浅ましき食は　猥らな思考と暗愚な生活を　慎ましき食は　気高い思想と明晰な日々を
真の健康へと至る道はすぐ側にあり　古の智慧にならい食餌を正しくすることが　人間が人間として
道理を取り戻す最良の法であると信ずる。

http://www.daitouryu.com/syokuyou/

新刊書籍案内
曽川和翁著　「大東流入身投げ」
発行：株式会社愛隆堂
発売定価　１８００円＋税
〒802-0985 北九州市小倉南区志井6丁目11-13
㈱綱武出版☎093（962）7740